

韓国における丸山眞男の 思想・学問の受けとめられ方

金 錫 根

I 遺産と記憶

丸山眞男（一九一四―一九六）、彼は戦後日本を代表する政治学者・知識人・思想家として韓国の学界と知識人の間で広く知られている。「丸山政治学」「丸山思想史学」という用語もあるが、やはり「日本学界の天皇」ないし「丸山天皇」という文句のほうが多く用いられている。韓国に紹介された一連の日本の知識人^①の中で断然目立っている。

彼は政治学と政治思想史という専攻分野を超えて、韓国の人文・社会科学全般にわたって影響を及ぼした知識人・思想家といえる。代表作『日本政治思想史研究』は韓国政治思想史研究と方法論にこの上なく大きい影響を及ぼした。また第二次大戦以前の日本の天皇制ファシ

ズム及び軍国主義分析と批判は多くの共感を得た。「超国家主義の論理と心理」と「抑圧移譲の原理」「無責任の体系」などは常識のようになっていく。また彼がクラシック音楽の愛好家であると同時に、文学と芸術にも造詣が深い、文字どおりの「教養人」であったということともよく知られている。

周知のとおり、若い頃の彼は現実に積極的に参加して発言しつつ行動する現代日本の代表的な批判的知性であった。戦後デモクラシーの精神的・理論的支柱でもあった。しかし晩年には現実参加と発言・著述などを「夜店」（二種の副業）、日本（政治）思想史研究を自分の本領すなわち「本店」と呼び、自分の日本思想史研究をもっとたくさん読んでくれたら良いと吐露したりもした^②。

個人的な性向としてみると、彼は韓国人の知識人にとつてとても魅力的な人物でもある。研究室にこもって自分の学問にだけ集中する日本の多くの学者、あるいは江戸時代の儒者とは確かに違って見えるからである。それよりはむしろ韓国の知識人のイメージ、言い換えれば自分の思想を土台にして積極的に社会的発言をするともに、直接行動する批判的な知識人というイメージに近い。

そのうえ彼の人生と思想は韓国社会に対しても多くのことを考えさせる魅力的な存在であるといえる。若い頃の彼には、近代的な抑圧装置としての留置場と軍隊体験が目立つ。韓国の若者たちに軍隊経験は依然として強烈な体験と考えられており、留置場体験は民主化運動に身を投じた世代、特に投獄経験がある人々にはとても親近感がある。それが全てではない。彼は一九六〇年代後半、全共闘（全学共闘会議）の運動家との激しい葛藤も経験した。一九八〇年代の韓国でも、運動家の学生たちの暴力的で過激なデモがあった。丸山眞男の苦悩と若者たちに向けた一喝も多くのことを示唆している。

一九九〇年代中盤から丸山眞男の主要な著作が韓国に翻訳・紹介され始め、それとともに知識人・思想家としての彼に対する研究も進められている。専ら彼をテーマにした国際学術シンポジウムも開催された。特に二〇一四年七月には彼の誕生一〇〇周年を記念する学術シンポジウム「丸山眞男誕生一〇〇周年記念国際学術会議（丸山眞男と東

アジア思想…近代性、民主主義、そして儒教」がソウルで開催された。韓国と日本の研究者・学者が一堂に会して、彼の思想と学問を巡って真摯な論議を交わした。「生誕一〇〇年という理由で日本人学者を記念する学術会議が韓国で開かれるのは前例がないこと」であつた。³⁾

今年（二〇一六年）は彼が他界してから二〇年目の年である。彼が遺した思想と学問が一時代を風靡した知的な遺産であるという点は誰も否定しないだろう。しかし単なる知的な「遺産」ということと、今日の時点においていかなる現在の「含意」を持ちうるか、そしてその含意を読み取って「記憶」するかということは、少々次元が違う話だと思う。

今回の発表では、丸山眞男の思想と学問が韓国社会にどのように受け入れられ、またどのような側面から論議されてきたかという点を検討したい。同時に、彼の思想と学問から何を期待することができ、またどんな示唆を得ることができるのかについても一緒に考えてみたい。

Ⅱ 紹介と受容、そして翻訳

（１）紹介と留學

丸山眞男の思想と学問が韓国社会に知られたしたのは、大体解放以

後日本に留学した第一世代の留学生の話から始まる。東京大学法学部に留学した朴忠錫（一九三六—）教授、金榮作（一九四一—）教授、崔相竜（一九四二—）教授などである。^④彼らの日本留学は日本との国交正常化（一九六五年）以前からすでに行われはじめていた。

留学生としての彼らは、当時東京大学で名を轟かせていた丸山眞男の授業を聴いて多くの知的な影響を受けたことと思われる。^⑤特に朴忠錫教授の場合、直接丸山眞男の指導を受けたし、博士の学位を取得した。^⑥彼は丸山眞男生誕一〇〇年記念講演会（二〇一四年）で「丸山眞男の社会科学と韓国」というテーマで講演もした。^⑦

しかし、彼らより先に韓国で丸山眞男を「発見」した学者がいた。①洪以燮（一九一四—七四）教授と②李用熙（一九一七—九七）教授である。その時期を推定すればおよそ一九五〇年代と思われる。それ以前にさかのぼることもできるだろう。彼らは丸山眞男の「同時代人」といえる。

一九六〇年代初頭、日本に留学しようとする朴忠錫教授に洪以燮（延世大）教授は丸山眞男教授を推薦して、彼のもとへ行つて思想史研究をするように勧めた。洪以燮教授の専攻は韓国史と韓国思想史研究、特に彼が没頭して独自の成果を残している分野は、茶山丁若鏞（一七六二—一八三六）の実学思想である。『丁若鏞の政治経済思想研究』（韓

国研究図書館、一九五九年）は朝鮮後期の実学を集大成した丁若鏞の思想についての本格的かつ総合的な研究成果と考えられている。朝鮮後期の新しい流れとしての実学、朱子学に対するアンチテーゼとしての実学という命題は、実は筆者が見るところ、『日本政治思想史研究』、特に一番目の論文と一脈相通するものでもある。

一方、李用熙（ソウル大）教授は国際政治学を専攻した学者で、しばしば韓国国際政治学の分野を開拓した学者という評価を受けている。代表作は『一般国際政治学』（博英社、一九六二年）と『韓国民族主義』（瑞文堂、一九七七年）。彼は「国際政治は強大国の視点ではなく、わが土地、わが視点から見なければならぬ」と提唱して、主体的な学問研究の必要性を力説した。^⑧彼はまた芸術、特に韓国美術について造詣が深かったゆえ、東州という雅号で『韓国絵画小史』（瑞文堂、一九七二年）、『我が国の古絵画』（博英社、一九七五年）という著作も残した。芸術（美術）に対する嗜好や民族主義に対する関心は丸山眞男に似ているという感じをあたえる。そのうえ「民族主義」の部分では『現代政治の思想と行動』（未来社（上・下）一九五六・五七年）をすでに参照していたような感すらある。

植民地時代に大学に通っていた洪以燮教授と李用熙教授は当然日本語を読み、話すことができたし、それだけに同時代の日本の学界や知性界に対して関心を持っていたものとみられる。とりわけ自分の関心

分野に関してはそうである。特に李用熙教授は、留学中の金榮作（一九四一—）教授を通じて、一九六〇年代に丸山眞男と直接会って何回か話を交わしたことが確認されている。^⑨こうしてみると『日本政治思想史研究』と『現代政治の思想と行動』の刊行とはほとんど同じ時期に（あるいは少し遅く）知識人の間に学問的交流が成り立っていたと言えるだろう。

（2）翻訳と受容

わたしが丸山眞男という名前を初めて耳にしたのは大学院時代、朴忠錫教授の『韓国政治思想史』の授業であった。韓国政治思想史という分野を勉強しようとしていた新人時代だった。哲学史や思想史とは違う次元での政治思想史、特に「方法論」に関して悩んでいた頃、それこそ新しい光を見つけたようなものであった。ろくに読むこともできない『日本政治思想史研究』をいつも持って歩いていた記憶がある。

「どこでも自分が勉強したい国・大学へ行って一年間勉強できる奨学金」をもらった時、筆者が選択したのは当然東京大学法学部であった。一年間の短い留学であったが、良い経験であった。短かったが立派な先生（渡辺浩、平石直昭）たちの教えを受けることができた。率直に言って、韓国に帰ってきた後、今まで良い先生とずっと勉強していたら良かったのにと惜しんだことも多かった。わたしがやるべき分野は「日本（政治）思想史」ではなく「韓国（政治）思想史」だと自

分をなくさめたりもした。

実は一九八〇年代から日本近代史、現代史に対する関心が高まり、丸山眞男の論文あるいは著作の一部が翻訳されていた。まだ「著作権」が確立される以前であった。「完訳」ではないうえ誤訳が多かった。わたしは一種の勉強法として、丸山眞男の著作を韓国語で翻訳する作業をするようになった。多目的の一種の「夜店」を開くようになったわけである。わたしは丸山眞男の著作の訳者として知られるようになった。^⑩これまで筆者が韓国語で翻訳（完訳）した主要著作は以下の通りである。（「」は韓国語訳の出版年）

- ①『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二年／新装版一九八三年）「一九九五年」
- ②『現代政治の思想と行動』（未來社〈上・下〉一九五六—五七年／合本増補版一九六四年／新装版二〇〇六年）「一九九七年」
- ③『日本の思想』（岩波新書、一九六一年、改版二〇一五年）「一九九八年、二〇一二年」
- ④『戦中と戦後の間 一九三六—一九五七』（みすず書房、一九七六年）「二〇一二年」
- ⑤『文明論の概略』を読む（上・中・下、岩波新書、一九八六年）「二〇〇七年」
- ⑥『忠誠と反逆——転形期日本の精神的位相』（筑摩書房、一九九二

年／ちくま学芸文庫、一九九八年）「一九九八年」

⑧『丸山眞男講義録』（第六冊・第七冊、東京大学出版会、一九九八・二〇〇〇年）「二〇一七年（予定）」

日本で出版された順番に沿って韓国語訳が出たわけではない。やはり韓国の状況と絡み合っているからであろう。とにかく、本格的な著作翻訳が一九九五年から始まったという点は示唆的である。一九九五年という時点は、韓国では解放五〇周年・韓日国交正常化三〇周年にあたる年である。

どうしてようやく完訳が出るようになったのか。別の言い方をすればどうして筆者が丸山眞男の著作を翻訳する光榮に浴するようになったのだろうか。まず、全般的に韓国学界では西欧、特にアメリカとヨーロッパへの志向性が強かったという点があげられる。特にアメリカが知識と学問の本場と思われていたからである。第二に、日本学界に対する相対的な無関心と過小評価。植民地支配や親日派に対する反感とともに、日本や日本学に対する関心は語学と文学くらいにとどまっていた。第三に、韓国学界に「翻訳」作業を軽視する傾向があった。学界では翻訳に対して正当な意義を認めなかった。しかも日本語の場合、植民地時代に大学・専門学校に通った世代によって時折行われていた^⑤、西洋書籍の場合、日本語翻訳を参照して翻訳する「重訳」作業がなされてもいた。

とにかく、丸山眞男の学問の本領であると同時に出発点といえる①『日本政治思想史研究』の翻訳は学界に相当な「衝撃」を与えたことと思われる。二五歳の時の作品という事実、そしてその著作を通じて示した知的な深さと幅がそうであった。続いて②『現代政治の思想と行動』はハンギル社 (Hangilsa) グレートブックス (Great Books) の一卷 (022) におさまった。「人類の偉大な知的遺産」というキャッチフレーズを掲げたシリーズに日本人学者の本が含まれたということは注目し値する点である。韓国語の翻訳版では英語版 *Thought and Behavior in Modern Japanese Politics* の序文まで翻訳して載せた。

『朝鮮日報』書評欄で大きく扱われ（一九九七年四月四日付）、韓国の意識ある読者の間に丸山眞男を知らしめるもう一つのきっかけになった。同じ出版社から出た③『日本の思想』は版型を替えて二度にもわたって刊行された。一九九八年には Culture Books の一卷として、そして二〇一二年には Ideal Library（理想の図書館）シリーズに含まれた^④。その本には、恥ずかしながらわたしが丸山眞男の計報（一九九六年）を伝え聞いて書いた追悼文「丸山眞男の生と思想を考える——彼の訃音に付して」も掲載されている。

④『戦中と戦後の間 一九三六—一九五七』は、日本国際交流基金の翻訳・製作支援をうけた（出版社は Humanist）。⑥『忠誠と反逆——転形期日本の精神的位相』は朴忠錫教授との共訳として出版されたし、その過程で韓国学術振興財団（現在韓国研究財団）の翻訳支援を

うけた『翻訳叢書224』。出版社ナナム (Nanam) は、濠洲 (Australia) のシドニー (Sydney) で開催されたアジア太平洋出版協会において、韓国出版社としては初めて翻訳図書出版銀賞を受けた(一九九九年)。

⑧『丸山眞男講義録』(第六冊・第七冊)は「東アジア人文図書一〇〇冊」に含まれ、ハングル社 (Hangilsa) で刊行される予定である。翻訳作業はすでに終了している。

Ⅲ 深化と研究

(1) 研究とシンポジウム

丸山眞男の著作の翻訳とともに、学界はもちろん大学生・一般人の間でも広く読まれ始めた。今まで一番多く読まれた本はやはり『現代政治の思想と行動』と『日本政治思想史研究』ではないかと思う。今も根強く読まれ続けている。大学生・大学院生の間でも、日本学者の中にそんなすごい人もいたのか、少し驚いたという反応もあった。

韓国において、一九四五年を前後して生まれた世代は、反日感情のせいか意図的に日本語を学ばなかったり読まなかったりした人々も多かった。たまに彼らから翻訳を通してよく読みましたと挨拶される時があった。「日本に対する再認識」といってもいいだろう。このような流れは一九九〇年代中盤以後にも起こった「日本認識」「日本の知識人社会」に対する関心にも一役買ったといえる。あの頃まで一部に

残っていた日本の思想・知識人に対する偏見と先入観もある程度消えた。¹²⁾

以後 丸山眞男を扱った日本の著作が翻訳・紹介されている。敢えて翻訳する必要があるのかと思う本もあった。これについては後からまた扱うことにする。とにかく注目に値する諸本では①丸山眞男・加藤周一『翻訳と日本の近代』(岩波新書、一九九八年)「二〇〇〇年」、②荻部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』(岩波新書、二〇〇六年)「二〇一一年」、③小林正弥編『丸山眞男論——主体的作為、ファシズム、市民社会』(東京大学出版会、二〇〇三年)「二〇一三年」などをあげることができる。¹³⁾ 丸山眞男を理解するのに直接・間接的に役に立つといえる。

今まで丸山眞男に関する本格的な研究書や単行本は出ていないが、彼の思想と学問をテーマにした論文が相次いで発表されている。やはりそのうち出ると思われる。筆者もある出版社からそんな要請を受けた。以下では丸山眞男研究と関係して注目するに値する事例として二点を指摘したい。

まず、韓国人として京都大学に留学し、丸山眞男を研究して博士の学位を取得した魯炳浩博士がいる。論文タイトルは「吉野作造と丸山眞男 民本主義と永久革命、その交錯と分裂」(京都大学人間・環境学

研究科、二〇〇六年）。本格的な研究者が登場したわけであり、彼は丸山眞男関連論文を活発に発表している⁽¹⁴⁾。

また、専ら丸山眞男をテーマとして、二〇一三年と二〇一四年に学術シンポジウムが開催された点である。二〇一三年七月四、五日、峨山政策研究院で「丸山眞男と自由主義…冷戦時代を生きた知識人の思想と行動」(“Liberalist, Maruyama Masao: An Intellectual's Thought and Behavior in the Cold War Period”) というテーマでシンポジウムを開催した。シンポジウムは「峨山冷戦自由主義プロジェクト (Cold War Liberalism Project)」の一環として行われた。⁽¹⁵⁾ 丸山眞男に関心を持った韓国と日本の研究者が集まって論議することができた。⁽¹⁶⁾ そこで発表した原稿は修正を経て出版された。⁽¹⁷⁾

その学術会議が終わった後、丸山眞男誕生一〇〇周年にあたる二〇一四年、韓国と日本の研究者が彼の学問と思想を考える学術会議を開催した。峨山政策研究院の後援を受けて、丸山眞男誕生一〇〇周年記念国際学術会議「丸山眞男と東アジア思想…近代性、民主主義、そして儒教」というタイトルでシンポジウムを開催した（七月二四、二五日）。丸山眞男に関心を持つ韓国と日本の学者・研究者が多数参加した。韓国では「第一世代」の日本留学生から最近の留学生に至るまでほとんどを網羅する盛況であった。⁽¹⁸⁾ 四つのセッションで構成され、活発な討論と論議が行われた。⁽¹⁹⁾ 発表された論文は、修正を経て早い時期

に出版される予定である。『朝鮮日報』など多くのマスコミでも報道された。⁽²⁰⁾

（２）批判と論難

学問的な深さと幅、第二次世界大戦前の日本軍国主義ファシズムに対する批判、「責任」ある良心的な主体の形成、そして第二次世界大戦以後のデモクラシーの象徴として彼が繰り広げた多彩な活動などによって多くの韓国人に深い感銘を与えたことは否定しがたい事実であるといえる。

しかし、当然ながらひたすら礼賛ばかりがあるのではなかった。丸山眞男といえども批判と論争から無縁ではいられない。むしろ批判と論争を通して思想と学問の克服／継承と発展が可能であると見るからである。しかし、丸山眞男神話に対する反動（？）として、批判と論難が伴い、意図的な批判のための批判のケースもあった。敢えてなぜあんな本が出なければならないのかという翻訳や紹介もあった。自身の研究が進んでいないのなら、いつそのこと日本で定評のある著作が翻訳されたほうがいいのではないかと思う。

以下では今日の韓国で丸山眞男をめぐる提起される多様な批判と論難に対して、手短に何種類かの争点に分けて整理していきたい。

① 思想史を見る視点と方法と関連して、朱子学的思惟の解体と近代的思惟の形成問題。「学界以外の領域で日本政治思想史というジャンルが初めて市民権を得た思いです」。「日本政治思想史研究において多大な業績」(受賞理由)が認められて一九八五年度に朝日賞を受賞した直後(一九八六年一月)、丸山が自分の所感を書いた文に付けたタイトルである。⁽²¹⁾ 韓国政治思想史を勉強する筆者としては、果たして韓国ではどうするだろうかという考えとともに、そんな発言が出るのがすごく羨ましかった。丸山眞男は『日本政治思想史研究』を通して朱子学的思惟の解体と近代的思惟の形成という命題を明らかに提示した。それに対する批判は、すでに日本学界では充分なされていたとみえ、韓国にも紹介された。⁽²²⁾ 時には韓国では繰り返されて拡大再生産されているという感じをたまに受けたりする。「弁護」しようというのではないが『日本政治思想史研究』の英語版序文などを詳しく読んでみれば、著者自身の誤解やその頃の視点をもつ問題点に対しては自ら認めているということが分かる。⁽²³⁾

② 「近代主義者」ないし「国民主義」者という批判。よく彼は「解体されるべき民主主義者」と名指しされたりする。丸山眞男の学問において「近代性」と「国民国家」形成が主要なテーマであったことを否認することはできないだろう。特に西勢東漸と帝国主義の時代に非西欧地域での近代国民国家の形成は国家の存立とかかわる事案であった。時代的な懸案であった。日本は唯一そのような近代化に

成功した事例であると考えられてきた。同時に、日本の近代化には、ある段階以後には暗い影が落とされた側面もあった。どの側面に注目しようかという問題ともいえる。時代の流れとともにそのような視点に対して「脱近代」「脱国民」のポストモダン主義の観点から批判が述べられることはやはり一面では自然であるが、やりすぎだという感じを受ける時もある。⁽²⁴⁾ 『日本の思想』を詳らかに見れば、彼は西欧の近代体験を絶対化するよりは一つの方法ないし準拠によって選んだように思われる。彼は「前近代」と「超近代」の重畳あるいは「非近代」と「過近代」の同時的存在こそ日本社会の特性であると看破した。

③ 「近代」「国民国家」と関連して西欧の近代と国民国家(nation state)を理想化した「欠如論者」という批判が提起された。その延長線の上で「西欧中心主義」(Eurocentrism)と「オリエンタリズム」(Orientalism)、もつと具体的には「日本的な」オリエンタリズムという批判。最近では「日本主義者」という批判も出ている。⁽²⁵⁾ 「日本主義者」と健康な「ナショナリスト」の間には距離がある。丸山眞男は「国民国家としての日本」を自明なものと見ていた。そしてそのような視点から朝鮮など他のアジア地域を眺めたというのである。⁽²⁶⁾ 丸山眞男は帝国主義侵略と植民地支配を積極的に肯定しなかったとしても植民地支配に対して「鈍感」だとか努力して「反省」しなかったという批判も出ている。また在日韓国人問題に対しても沈黙

したままだったという指摘も出た。

④ 最近最も目立つ批判は、丸山眞男が福沢諭吉について誤った認識ないし解説を加えているというものである。丸山眞男が『文明論之概略』を読む⁽²⁷⁾を書いただけに、そしてその韓国語訳が出ているだけに批判も直接的で具体的である。「侵略」を主張した福沢諭吉の思想に対して丸山が自分の型にあてはめて解釈しているとか、ひいては侵略を正当化する論理を提供しているのではないかというものである。『文明論之概略』を別の視点から読む著作も翻訳・紹介された。⁽²⁸⁾福沢諭吉のアジア認識に対する批判、ひいては『丸山諭吉』神話を解体する⁽²⁹⁾という副題を持った本も翻訳・紹介された。韓国で「悪名高い」福沢諭吉に「自由主義者」という幻想をかぶせて、ひたすら好みに合う文言にのみ注目してきたという辛辣な批判は韓国人の関心を引くに値するのである。主要新聞の書評欄でも大きく扱われた。⁽³⁰⁾

⑤ 文化接触と変容過程で外来思想を「日本化」させる契機として繰り返し作用する思考のパターンを重視して丸山眞男が駆使した概念、すなわち「原型」(prototype)あるいは「原型的世界像」、「古層」そして「執拗低音」(basso ostinato)など、⁽³¹⁾いわゆる「古層」論に対する批判。⁽³²⁾日本思想史に固有の構造と契機を究明しようとする本来の意図とは異なり、自分の先験的な主観(例えば「つぎつぎなりゆ

くいきほひ」といったもの)を歴史と思想に対して投射させる危険も内在しているといえよう。⁽³³⁾

これらのほかに、丸山眞男の著作の細部に対する多様な批判が提起されている。たとえば、東京裁判に対して彼が偏見と先入観を持って解釈することで日本ファシズムと指導層の精神世界を意図的に歪曲したという批判も出ている。⁽³⁴⁾彼の思想と著作を巡る学問的な批判と論難を通して、韓国における丸山眞男理解と研究はいっそう深くなると思われる。

IV 反響とカガミ(鏡)

丸山眞男が生きていた時代(一九一四―一九六)は二〇世紀でも歴史的転機と言えるだろう。彼は東アジアの知識人の中で、東洋と西洋の出会い(融合)、伝統と現代の調和という面で最も際立った思想家であった。それだけでなく、激動期を生きて若い時代の自分の「思想」によって「行動」もした純粋な知性でもあった。

彼は明治維新以後の近代化、軍国主義と帝国主義、そして戦争の時代を直接体験し、そのような歴史的な流れに対して果敢に分析して辛辣に批判した。ナショナリズムと超国家主義の間の連続と断絶に対する洞察力もそうであった。周知のように、戦後日本のデモクラシーと

いう面でも彼の残した遺産は大きかった。細部において少々批判があるとは言っても、彼の主張と含意は相変わらず輝いているだけでなく、大きな「反響」を呼び起こしたと思う。

かねてより彼が主唱していた「個人」の「主体意識」と「良心」、そして「責任」などに対して、私としては相変わらず共感する方である。現実的に可能かということとは別の事案である。今もあちこちに残っている儒教的な遺風に人的なネットワーク（例えば血縁・地縁・学縁など）が影響を及ぼしている韓国社会を批判する重要な「方法」の一つとして活用している。受容された理念や制度がある瞬間に「韓国化」する傾向、あるいは「韓国的なもの」に対する牽制と批判のために「執拗低音」(basso ostinato) という範疇も選択的かつ戦略的に用いている。

また、韓国でのいわゆる「民主化」以後のデモクラシーに対して、多くの点を示唆してくれている。絶え間ない過程、運動としてのデモクラシー、すなわち「永久革命」としての「民主主義」論を挙げることができる。丸山眞男は「個人」の「主体性」と「自由」を顧みない全体主義に対して深く憂慮した、と同時に多数の専制と横暴 (Tyranny of the Majority)、『そして民衆主義とポピュリズム (populism) に対しても同じく憂慮していた。政治的「主体」という側面から、民衆・大衆 (the mass)・群衆 (the crowd) に対して批判的な距離

を維持する必要があるといえよう。主体としての「個人」と「市民」の問題は相変わらず現在進行形である³⁵⁾と考える。

それと同時に、そして反射的に気になることは、現在日本社会において丸山眞男の思想と学問はいかなる社会的意味を持っているか、そして持ちうるかということである。「日本人の自己批判」としての丸山眞男思想は現在日本でどんな意味と適実性を持っているか、そしてどのように批判的に継承されているか。今回の学術シンポジウムを通して、その実際の一端でも確認することができればと思う。

すでに知られているように、最近二、三年の間の日本は国家進路と関連して大きな変化を経験しているようである。全世界的に国際政治の構図とからみ合っているという点はそれなりに理解することができ、隣国としては少々憂慮されることも否定できない。歴史修正主義、靖国神社参拝、集団的自衛権（平和憲法）、憲法改憲論議などを眺めていると、第二次大戦以前の時代、「日本歴史の暗い谷間」ないし一九三〇、四〇年代の「超国家主義」がふと思ひ浮かぶ。³⁶⁾

こうした側面から見れば、激動の時代を熾烈に生きた丸山眞男の思想と学問は、今後の日本の国家進路を設定していく中で自らを映して見ることのできる良い「鏡」となりうるのではないか。誇らしい知的な遺産をただ持っているだけではなく、今日の状況と自己をふりかえ

りながら、新しく生かしていくことが必要であろう。記憶と吟味を通して「現在化」させる作業といってもいいだろう。韓日関係においても自己反省と他者理解を通じて「嫌韓」と「反日」を越えて共に前進する契機を見出すこともできるのではないかと思う⁽³⁷⁾。

注

- (1) 例えば竹内好（一九一〇—七七）、吉本隆明（一九二四—二〇二二）、坂本義和（一九二七—二〇一四）、藤田省三（一九二七—二〇〇三）、子安宣邦（一九三三—）、安丸良夫（一九三四—二〇一六）、和田春樹（一九三八—）、大江健三郎（一九三五—）、柄谷行人（一九四一—）、上野千鶴子（一九四八—）など。
- (2) 石川真澄・杉山光信・丸山「夜店と本店と——丸山眞男氏に聞く」『丸山眞男座談』第九巻、岩波書店、一九九五年。
- (3) 『朝鮮日報』二〇一四年七月二十四日。
- (4) 金榮作教授は日本政府から「旭日中綬章」を授与され（二〇〇六年）、駐日大使を務めた崔相竜教授は勳一等旭日大綬章を授与された（二〇〇二年）。
- (5) 国際政治学を専攻した金榮作・崔相竜教授は特に丸山眞男の「ナショナルリズム」研究から多くの影響を受けたと考えられる。「東京大学法学部政治学科時代の恩師の中には日本で「とても有名な著名な教授が多かった。いちいちすべてを挙げることはできないが、何人かの恩師に関してだけ簡単に言及しておくことにする。日本政治思想史専攻の丸山眞男教授は、彼の代表的な著書である『日本政治思想史研究』（東京大学出版会）を含めた数十冊の著書と戦後日本の進路に関する政治評論集及び「講義録会」などを通して日本の精神世界を導いていた。彼の名講義は大学院時代の私の「ひよっこ学者」としての研究に大いに役に立った。」金榮作「解放後一世代日本留學生の懐古」『日本批評』第一二号、二〇一五年を参照。
- (6) 朴忠錫「丸山眞男先生を師として——私の学問の歩み」『丸山眞男手帖』第二四号、二〇〇三年。
- (7) 朴忠錫「丸山眞男の社会科学と韓国」『丸山眞男手帖』第六九号、二〇一四年。丸山眞男生誕一〇〇年記念講演会、講演原稿。
- (8) 彼は「圏域理論」と「場の論理」と呼ばれる卓越した学問的業績を残した政治学者と評価されている。中国・モンゴルなどアジア全域にわたる宗教・地理・文明史の全般についての該博な学問的造詣と洞察を持っていた。
- (9) 朴忠錫「丸山眞男の社会科学と韓国」『丸山眞男手帖』第六九号、二〇一四年。
- (10) 金錫根「丸山眞男の著作の韓国語翻訳について」『丸山眞男手帖』第三六号、二〇〇六年参照。
- (11) 例えばフランス文学者鄭明煥教授（ソウル大師範大）は、「思想界」一九六八年六月号に「日本の思想——丸山眞男教授の論文を紹介する」を載せている。そこで丸山眞男の『日本の思想』を扱っている。彼は福沢諭吉の『文明論之概略』を翻訳したりもした。
- (12) 次のような記事が挙げられよう。「二〇世紀思想を探して——丸山眞男の政治学」『朝鮮日報』一九九九年七月二二日、「不滅の著者——丸山眞男」『朝鮮日報』二〇一三年八月三日。二篇はいずれも依頼を受けて筆者が執筆した。
- (13) ①「翻訳と日本の近代」については筆者が『朝鮮日報』に書評を書き、③「丸山眞男論——主体的作為、ファシズム、市民社会」は筆者が直接翻訳もした。例えば「思想のない思想」と丸山眞男の「思想」——全共闘的な丸山批判に対する批判的再検討——『日本思想』韓国日本思想史学会、二〇一四年、「丸山眞男の〈永久革命〉論——その思想的系譜」『韓国東洋政治思想史研究』二〇一三年、「日本のデモクラシーと一九六〇年——清水幾太郎と丸山眞男」『韓国東洋政治思想史研究』二〇〇九年、「丸山眞男とヘーゲル」『日本研究』二〇〇七年三月。
- (15) 冷戦自由主義プロジェクトとは、かつてアメリカとソ連が尖鋭に対立していた「冷戦」時代の自由主義思想家を集中的に再評価する学術シンポジウムのことを言う。そのシリーズは該当する思想家の生涯と思想を扱った評伝

を翻訳・出版し、その著者を招待して講演会を開き、またその分野の専門家が集まって国際学術会議を開催する方式でなされてきた。そのシリーズでは Isaiah Berlin (一九〇九—一九九七)、Michael Oakeshott (一九〇一—一九九〇)、Friedrich Hayek (一九八九—一九九七)、Karl Popper (一九〇二—一九九四)、Raymond Aron (一九〇五—一九八三) が扱われ、東アジア思想家では唯一丸山眞男が扱われた。

- (16) 参加者は日本側：渡辺浩（法政大）、飯田泰三（法政大）、松田宏一郎（立教大）、河野有理（首都大）、苅部直（東京大）、清水靖久（九州大）。韓国側：金錫根（峨山政策研究院）、金榮作（国民大）、金弘宇（ソウル大）、魯炳浩（韓国外国語大）、朴忠錫（梨花女大）、朴鴻圭（高麗大）、李洪九（中央日報）、崔相龍（高麗大）。

- (17) 金錫根・苅部直編『丸山眞男と自由主義：冷戦時代を生きた知識人の思想と行動』峨山書院、二〇一四年。

- (18) 日本側：渡辺浩（法政大）、大久保健晴（慶応大）、河野有理（首都大）、苅部直（東京大）、杉田敦（法政大）、米原謙（大阪大）、都築勉（信州大）、松本礼二（早稲田大）。韓国側：金錫根（峨山政策研究院）、金榮作（国民大）、金弘宇（ソウル大）、魯炳浩（韓国外国語大）、朴忠錫（梨花女大）、朴鴻圭（高麗大）、李洪九（中央日報）、崔相龍（高麗大）、劉咄爛（慶熙大）、姜東局（名古屋大）、高熙卓（延世大）、李基原（江原大）、張寅性（ソウル大）、李鍾殷（国民大）、姜正仁（西江大）、金鳳珍（北九州大）、金永寿（嶺南大）、李礼安（翰林大）、裴柄三（靈山大）。

- (19) 第一セッション「日本儒学と近代性」、第二セッション「江戸時代儒学と日本思想」、第三セッション「近代日本と韓国認識」、第四セッション「市民と政治そして民主主義」。

- (20) 日本軍国主義を批判した丸山再評価。「生誕から一〇〇年になったという理由で日本人学者を記念する学術会議が韓国で開かれることは前例がない事である。日本を代表する政治思想家で『学界の天皇』と呼ばれた丸山眞男（一九一四—一九九六）の誕生一〇〇周年記念韓・日国際学術会議が二四日から二日間、ソウル慶熙宮一街路の峨山政策研究院講堂で開かれる。丸山の直

弟子である渡辺浩法政大教授など日本学者八人と国内研究者が参加する。峨山政策研究院（院長 咸在鳳）主催「朝鮮日報」二〇一四年七月二四日。『朝日人』一九八六年三月号、『丸山眞男集』第一六巻、岩波書店、一九九六年、三六五頁。

- (22) 例えば、渡辺浩『近世日本社会と宋学』（東京大学出版会、一九八五年）二〇〇七年。

- (23) 彼自身も中国のアイデンティティをそのまま前提して論議を展開した部分と、近代化の単一的経路などに対して過ちを自ら認めた。

- (24) 中野敏男「大塚久雄と丸山眞男動員・主体・戦争責任」（青土社、二〇〇一年）、「二〇〇五年」、子安宣邦『日本近代思想批判』（岩波現代文庫、二〇〇三年）、「近代知のアルケオロジー 国家と翻訳と知識人」（岩波書店、一九九六年）、「二〇〇七年」、李喜龍「丸山眞男の近代化論と脱近代」『東洋哲学研究』第五二冊、二〇〇七年。

- (25) 姜正仁（外）、「丸山眞男の政治思想に見られる西欧中心主義と日本中心主義」『政治思想研究』第一四輯二号、二〇〇八年、朴鴻圭「丸山眞男と日本主義」『政治思想研究』第二二輯二号、二〇一五年。

- (26) 宮嶋博史「日本の歴史観を批判する」創作と批評社、二〇一三年。

- (27) 子安宣邦『福沢諭吉「文明論之概略」精読』（岩波現代文庫、二〇〇五年）、「二〇〇七年」。

- (28) 安川寿之輔『福沢諭吉のアジア認識：日本近代史像をとらえ返す』（高文研、二〇〇〇年）、「二〇一一年」、安川寿之輔『福沢諭吉と丸山眞男：「丸山論吉」神話を解体する』（高文研、二〇〇三年）、「二〇一五年」。

- (29) 「至極当然のことですが、丸山が『日本』の思想家である、という点です。そして日本国内ではあまり意識されない彼の『国籍』が、韓国では極めて敏感に認識されているということです。そのような韓国からの視線では、侵略的な近代主義者福沢を偉大な思想家とし、「福沢惚れ」を自認する丸山を見ると、何か釈然としない感覚を覚えることになるわけです。」趙星銀「韓国における丸山眞男」（丸山眞男研究プロジェクト中間シンポジウム「丸山眞男記念比較思想研究センター報告」第十号、二〇一五年）。

- (30) 『朝鮮日報』二〇一一年四月九日、『東亜日報』二〇一五年七月二五日。
- (31) 例えば「歴史意識の「古層」」(一九七二年)、「思想史の方法を摸索して——一つの回想」(一九七八年)「日本思想史における「古層」の問題」(一九七九年)、「原型・古層・執拗低音——日本思想史方法論についての私の歩み」(一九八四年)
- (32) 金善花「丸山眞男の「古層」の解釈を巡る批判的研究——歴史意識の古層とメシア的時間」「日本文化研究」第四九集、二〇一四年、李喜馥「伝統思想と固有様式、そして日本思想・丸山眞男の日本思想史方法論を素材として」「人文科学研究」第二四輯、二〇一〇年、魯炳浩「歴史意識の古層と日本の近代——丸山眞男の二時間——」「日本研究」二〇〇八年、魯炳浩「丸山眞男における朝鮮論の古層」「社会システム研究」第八号、二〇〇五年。
- (33) 金錫根「丸山眞男の古代思想史研究——「原型・古層・執拗低音」に関して」(丸山眞男と東アジア思想・近代性・民主主義、そして儒教) 発表論文、二〇一四年。
- (34) 金弘宇「丸山眞男の東京裁判論考」「韓国政治の現象学的理解」人間サラン、二〇〇七年参照。
- (35) 金錫根「丸山眞男における「個人」と「市民」」「主体」と関連して」参照(金錫根・刈部直編『丸山眞男と自由主義：冷戦時代を生きた知識人の思想と行動』峨山書院、二〇一四年収録)。
- (36) 金錫根「集団的自衛権」「安保法案」処理、そして市民社会…安倍政権と「平和憲法」はどこに行くか」「今日の文芸批評」第一二〇二号、二〇一六年参照。
- (37) 韓国で丸山眞男のよき理解者でもある李洪九(一九三四—)教授(前ソウル大、現『中央日報』顧問)は「再び取り出して読む丸山眞男」というコラムでこう述べている。「どの国でも外国の批判や忠告によって歴史意識や国家進路が変わる場合はない。ただ国民自らの悩み・討論・省察を通してのみ未来に進む道を見出すのである。長くて因縁の多い歴史を持っている韓・中・日の三国の場合は特にそうならざるを得ない。韓国はもちろん、隣りの中国と日本でも深刻な自省の努力があることを願ってやまない。皆が立派な歴史と伝統を持った文化大国ではないか。六〇年前、敗戦後の混乱と沈

滞の中で展開された丸山眞男教授の冷静な、しかし進歩的な歴史認識と政治分析が今日どれほど有効かは断定することができない。しかし日本においてだけでも、彼の知性が満ち溢れる著書がたくさん読まれることを願わざるをえない」『中央日報』二〇一三年五月一三日。

